

# 大声でつぶやく けったいな町医者

作家・医学博士 長尾和宏



平穩死の生みの親 石飛幸三先生を追悼

「平穩死」の生みの親である石飛幸三先生が7月に亡くなった。死に思う医者、使命、責任を持つことと「気持ちを支えること」、歳をとるといふことは他者の死に慣れなくてはならないと実感する今、この頃だ。

還暦を過ぎると友人の訃報がぼつぼつ届くようになります。昔ほどショックを受けることはなく、ああアイツも逝ったのかと、一緒に船旅をしていた人が先に下船してしまったような心境に。

しかし、師と仰いでいた人の訃報は、また少し違う気持ちになります。後はお前がしっかりやれよ、そんな声が聞こえてきて背筋を正すのです。僕の心の師、医師の石飛先生は昭和10年生まれですから、享年は89か90だったはず。死因も分かりません。テレビやラジオに多く出演する有名医だったのにもかかわらず、訃報記事がどこを探しても見つかりません。そんなことってあるの？

だから僕がここに追悼文を書きます。石飛先生が有名になったのは2010年、『平穩死』のすめく

口から食べられなくなったらどうしますか(講談社)という本の出版からだど記憶していません。2005年から東京にある特別養護老人ホームの常勤医でした。施設で穏やかに枯れるように終末期を迎えた人に対してこんな治療をして、食べられなくなったら胃ろうを、と願う家族が多くいます。終末期の延命治療は、かえって苦しむことが分かっているのに、過剰な医療を施すことを多くの医師が「是

と思っています。あるとき石飛先生にこう伝えました。「在宅看取りであれば平穩死は叶います」。そして、在宅医の視点から僕が2012年に上梓してベストセラーになったのが『平穩死』10の条件、胃ろう、抗がん剤、延命治療いつやめますか? (ブツクマン社)です。石飛先生よりさらに踏み込んだからでしょうか、医療界からたくさん石を投げられました。延命治療を正義と捉えている医者にとって、僕は地動説を唱えたガリ

レオ・ガリレイに見えたのでしよう。石飛先生は僕を励ましてくれました。「いろんな意見があってもいいんだ。批判は甘んじて受けなさい」。あれから12年。医療崩壊は進みコロナ禍によって分断は大きくなるばかり。在宅医療にも金儲けで参入する企業が増えてきました。在宅死が増えたように見えても、それは孤独死だったり、医療から見放された人の死だったり。僕は医療に絶望し現場から卒業しました。

こんな状況のなかで、我が師・石飛先生がいなくなりました。「まだ諦めてはダメですよ」と言われたような気がします。先生はよくこう言っていました。医者にとっての2つの使命とは「責任を持つこと」と「気持ちを支えること」である、と。この2つのメッセージを、僕が若い世代に繋いでいきたいのですが。



長尾和宏オフィシャルサイト